

ペルシャ語訳ウパニシャッド『大いなる秘密 (*Sirr-i-Akbar*)』について

榎 和 良

ペルシャ語訳ウパニシャッド『大いなる秘密 (*Sirr-i-Akbar*)』は、ヒジュラ暦1067年(西暦1657年)ラマダーン月26日月曜日、ムガル皇帝シャー・ジャハーン
の長男ダーラー・シュコー王子によって完成された。この作品は、フランス人古
典学者アンクェティル・デュペロンによって『ウブネカット』としてラテン語訳
されたことからよく知られている。この翻訳についてはさまざまな評価がなされ
てきたが、作品そのものはいまだに興味をひかれる研究の余地を残している。本
稿では、この作品の文体について主として音写に注目しその特色を明らかにする
と共に、ダーラー・シュコーにとってのウパニシャッドの意味を前書きを手がかり
として考察してみたい。

* 底本として、インド国内と英国にある写本など 9 写本を中心として校訂出版されたもの¹⁾を用い、この中にも含まれる大英図書館所蔵写本²⁾を参考にする。

このペルシャ語訳ウパニシャッドは、ダーラー・シュコー自身による前書きの
後に、音写されたサンスクリット語の主要な術語の解説表及び翻訳されたウパニ
シャッドのリストが続き、個々のウパニシャッドの翻訳がなされ、終わりに簡単
な後書きが添えられた構成になっている。翻訳されたウパニシャッドの数につい
ては、デュペロン訳に示される50の他にさらに2つを加えた写本³⁾、アタルヴァ
・ヴェーダに属するもの34だけを抜粋した写本⁴⁾などがある。それらの配列に
ついては、チャーンドーギヤ・ウパニシャッドを初めとしてヌリシンハ・ウッタ
ラターパニーヤ・ウパニシャッドを終わりとするものの他に、リグ・ヴェーダ、
ヤジュル・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダに属するものの
順で訳されているもの⁵⁾など差がある。個々のウパニシャッドの章や節の区切り
は原則として明示されていないが、ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドの
ように各節ごとに冒頭の名称と終了の記述がなされているものもある。さらに、
それらの数についても、今日用いられているサンスクリット語テキストと比較し
てみると、チャーンドーギヤ・ウパニシャッドにかなりの欠落が見られる⁶⁾他に
ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド⁷⁾などにも多少の欠落が見られる。

ペルシャ語訳ウパニシャッド『大いなる秘密 (*Sirr-i-Akbar*)』について (榎) (53)

さらに前後を入れ替えたりまとめて訳したりする場合もある⁸⁾。また、プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドではカーヌヴァ派とマーディヤンディナ派の2つの版本が伝わっているが、全体としてカーヌヴァ派の伝承を基本としながらも第2章及び第3章では、語句の用法や説明の配列においてマーディヤンディナ派の伝承に従っている⁹⁾。さらに、ウパニシャッド・テキストに多く見られる相互の引用句や同一表現について比較してみると、同一ウパニシャッド中のごく近接した部分を除いては、必ずしも同一表現を用いていないという特色も見られる¹⁰⁾。

この翻訳では、術語解説表に挙げられたものの他に、本文中には数多くのサンスクリット語が音写の形で示されている。それらを検討してみると、音写の形やその用法についてこの翻訳とダーラー・シュコーの著書『二つの海に交わるところ (*Majma' ul Baḥrain*)』とに共通した特色が見られることが指摘できる。まず、複数形を表す -hā や -ān を語末に加えたり、被修飾語を示すエザーフェの符合 *ye* が表記されるなどペルシャ語文法に従った語形変化をさせている点があげられる。音写の文字の当て方は子音についてはおおよそ次のように整理できる。

* サンスクリット文字に対応するペルシャ文字、音写、文字の名称の順で配列する。

क- ک k kāf	ख- خ kh kāf & he	ग { گ k kāf گ g gāf	घ- غ gh gāf & he	ङ
च- چ ch che	छ- چ chh che & he	ज- ج j jīm	झ- چ jh jīm & he	ञ
ट { ت t te	ठ { ث th te & he	ड { د d dāl	ढ { د dh dāl & he	ण { ن n nūr
त	थ	द	ध	न
प- پ p pe	फ- ف ph pe & he	ब- ب b be	भ- ب bh be & he	म- م m mīm
य { ی y ye ج j jīm	र- ر r re	ल- ل l lām	व { و v wāw ب b be	
श { ش sh shīn س s sīn	ष { ش sh shīn خ kh kāf & he	स- س s sīn	ह- ه h he	

いくつかの音写において特徴的なものを一部あげてみると、(1) サンスクリット文字 (skt.) *ya* をペルシャ文字 (per.) で *ja* と読む場合 (以下、実例をサンスクリット語とそのペルシャ語音写、デュベロンによる音訳 < > の順で示す), e. g. antaryāmin → antarjāmī <antrdjami>¹¹⁾, yama → jam <djam>, yajamāna → jajamān <djadjman>; (2) skt. *ṣa* を per. *kha* と読む場合, e. g. upaniṣad → upanikhat <oupnek'hat>,

(54) ペルシャ語訳ウパニシャッド『大いなる秘密 (*Sirr-i-Akbar*)』について (榊)

manuṣya→mankha <mank'hoeh>, suṣumnā→sukhumnā <sak'hemna>; (3) skt. kṣa を per. *che* と *he* を用いて chha と読む場合, e. g. antarikṣa→antarchha <antrdjehteh>, akṣara→achhar <atscher>, nakṣatra→nachhatar <nadjhetr>; (4) skt. jña を per. *gāf* と *ye* を用いて ga や gya と読む場合, e. g. jñāna→gyān <kian>, yajña→jag <djak> などがある。これらは、当時、翻訳に協力し、サンスクリット語テキストを伝えたパンディットらの発音の特色を示すものともみなしてよいであろう。

前書きについても「過不足なく一字一句正確に訳した」と述べているように、原文に忠実であることに努めながらも、「注釈の代わりをなす」¹²⁾とまで評価されるように、文意を明らかにするために、音写で表した術語に解釈的説明を加えるなど冗長ともいえる翻訳になっている部分も多い。音写語の用法に関して見てみると、(1)音写語のみで示しなんらの解説も訳も加えない場合 e. g. ātman→ātmā <ātma>, brahman→baraham <brahm>, prāṇa→purān <pran>, (2)音写語を示し語義的な訳を加える場合 e. g. satya→sat <sat>「真理 (ḥaqq)」、amṛta→amrit <amrat>「不死 (bīzawāl)」, vyāpaka→biyāpak <biapak>「遍在 (muḥīṭ)」, sṛṣṭi→surisht <serest>「創造 (paidāyish)」, (3)音写語を示した後に注釈的説明を加える場合 e. g. prakṛti→purakrit <prakrat>「三つの属性の平衡状態」、adhy-ātma→adhyātam <adhiatam>「身体に関する念想」、tat tvam asi→tatuwamas <tatoumes>「かのアートマンは汝である」、(4)音写語を示した後、イスラームの解釈やスーフィズムの術語にあてて解説を加える場合 e. g. brahmā→barahmā <brahma>「ジブライール」、viṣṇu→bishun <beschn>「ミーカーイール」、mahā-deva→mahādev <mahadiw>「イスラフィーール」、jāgrat→jāgrat <djagrat>「現象界 (nāsūt)」, svapna→supan <sapen>「不可視界 (malakūt)」, suṣupti→sukhupat <sak'hepat>「鞞知界 (jabarūt)」, turīya→turyā <teria>「超越界 (lāhūt)」¹³⁾などの4種に分けられる。デュペロン訳では、時としてこうしたペルシャ語の訳語をも音訳してサンスクリット語の音訳と並べているので文体を難解にしているとも言えるが、ペルシャ語訳のこうした特徴をふまえると糸がほぐれその忠実な訳が読み取れると言える。

一方、この作品の前書きからダーラー・シュコーがこのウパニシャッドの翻訳をてがけるにあたった動機と彼の精神遍歴の跡を読み取ることができる。この作品の翻訳者は自らを「悲しみを離れたファキール」¹⁴⁾と称し、「彼」を主語に客観的に語り始める。以下、前書きの要点を追ってみたい。彼はヒジュラ暦1050年(西

ペルシャ語訳ウパニシャッド『大いなる秘密 (*Sirr-i-Akbar*)』について (榊) (55)
暦1640年) にカシュミールを訪れ、そこでイスラーム・スーフィズムのカーディリー教団の聖者ムッラー・シャー¹⁵⁾に出会った。そして他の多くの聖者にも会い、スーフィズムに関する作品を読み、自らもそれに関する書物を書いた。さらに彼は、モーゼの五書、福音書、詩篇などの聖典を読んだものの、そこに説かれる「神の唯一性 (tawḥīd)」の教えは抽象的で理解しがたく、ぞんざいな訳によってはその真意がつかめないことを知った。そこで目をインドに向けると、インドの天啓聖典たる4つのヴェーダによってこの「神の唯一性」が明らかにされていることに気づいた。そしてこの「隠さるべき秘密 (asrār-i-poshidāni)」という意味のウパニシャッドこそが「神の唯一性」の教えの精髓であり、コーランの教えとも矛盾せず、その註釈と言えると知った。かくて彼はこの翻訳を志し、自らの統治下にあったベナレスのヴェーダやウパニシャッドを知るパンディットやサンニヤシンらを集めて、過不足なく一字一句正確に訳し、ヒジュラ暦1067年 (西暦1657年) に完成させた。

こうした内容をもつ前書き¹⁶⁾に示されるのは、ダーラー・シュコーにとって、ウパニシャッド聖典は「神の唯一性」を説くものであったということである。個々のウパニシャッドの翻訳文の中にもこうした見方は現れており、brahmaavid や jñānin は「知者 (‘arif)」であり「神の唯一性を知る者 (muwaḥḥid)」と訳され¹⁷⁾、brahmavidyā は「神の唯一性を説く知識 (‘ilm-i-tawḥīd)」なのであり¹⁸⁾、ウパニシャッドは「神の唯一性を説く聖句 (āyat-i-tawḥīd)」と理解されている¹⁹⁾。このような見方は『二つの海の交わる場所』においても見られ、インド思想は「インド人 (ahl-i-hind)」や「インドの神の唯一性を知る人々 (muwaḥḥidān-i-hind)」の考え方として紹介されている。

以上ペルシャ語訳ウパニシャッド『大いなる秘密 (*Sirr-i-Akbar*)』の文体の特色の一端を指摘し、前書きを検討した。自らの精神遍歴の果てにダーラー・シュコーは、一人のイスラーム教徒としてウパニシャッド聖典にイスラームにおける主要な教義たる「神の唯一性 (tawḥīd)」の教えを見出し、註釈書の知識を持つ brahmaavid なる jñānin すなわち彼の言う muwaḥḥid の助けによってこの翻訳をてがけ、そこに示される教えを自らの思考範疇にあるイスラーム及びイスラーム・スーフィズムにあてはめて考え、それらの術語を交えて解説しようと努めた。それがこのペルシャ語訳ウパニシャッドであったと言える。

1) *Sirr-i-Akbar (Sirr-ul-Asrār)*, ed. by Tara Chand & S.M. R. Jalali Naini,

(56) ベルシャ語訳ウパニシャッド『大いなる秘密 (Sirr-i-Akbar)』について (榊)

- Tehran 1957. 本稿で参考にした大英図書館所蔵写本のように『最高の秘密 (Sirr-ul-Asrar)』〈fol. 20b, 363a〉と題されたものもある。
- 2) MS. British Library Add. 5616. C. R. Rieu, *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum* I, London 1879, pp. 54-55.
 - 3) MS. Āsiftiya Library 52. cf. B. J. Hasrat, *Dara Shikuh: Life and Works*, Vishvabharati 1953, pp. 254-55.
 - 4) MS. British Library Or. 1121. Rieu, *op. cit.*, p. 60.
 - 5) 3) 参照
 - 6) 1-1-10, 1-2-11~14, 1-3-8~12, 1-4-1, 1-5~7, 1-9-10~13, 2, 3-1~13, 3-15-2~7, 3-16-2~7, 3-17~18, 4-2-4~5, 4-16~17, 5-2-4~8, 5-3~10, 8-13~15 欠落。cf. *Sirr-i-Akbar*, pp. 50-51. Tara Chand, *Dara Shikoh and the Upanishads, Islamic Culture* Vol. 17, Oct., 1943, p. 403.
 - 7) 2-6, 4-4-19, 24, 4-5~6, 5-14~15, 6-3~5 欠落。
cf. A. Weber, *Indische Studien* I, Berlin 1850, p. 273.
 - 8) Kaṭha-up. 3-5~8, Chāndogya-up. 4-1-5~8, 4-15-5~6, 8-5-1~4 etc.
 - 9) ただし第2章4節と5節は入れ替わっていない。A. Weber はカーヌヴァ派の伝承に基づいていると解説する。7) 参照。一方、同じ二つの版本をもつイーシャー・ウパニシャッドではカーヌヴァ派の伝承にのみ基づいている。
 - 10) チャーンドーギヤ・ウパニシャッド 8-10-1 と 8-11-1, 8-10-2 と 8-10-4 などのように完全に一致するものを除いて、訳語的にはほぼ一致するというほどのものである。
 - 11) 母音の読み方については、ここではできる限りサンスクリット語に近い形にしたが、デュペロンの音訳との相違については写本の問題も含めて稿を改めて論じたい。
 - 12) A. Weber, *op. cit.*, p. 248.
 - 13) これらの精神的完成に至る4つの段階についてはダーラー・シュコーの著書『神への導きの書 (Risala-i-Haq-Numā)』に詳述されている。
 - 14) 同じ呼称は『二つの海の交わる場所』の前書きでも用いられている。*Majma' ul Bahrain*, ed. by M. Mahfuz-ul-Haq, Bibliotheca Indica, Work No. 246, Calcutta 1929, p. 80.
 - 15) ダーラー・シュコー自身が『聖者らの美德 (Sakinat-ul-Awliya')』にこの人物の生涯と言行について書いている他、姉のジャハナーラー・ベガムが伝記を書いている。*Sakinat-ul-Awliya'*, ed. by Tara Chand & S. M. R. Jalali Naini, Tehran 1965, p. 152-204. cf. Hasrat, *op. cit.*, pp. 80-96.
 - 16) 要約した前書き全体についての訳出は稿を改めて紹介したい。
 - 17) Bṛhadāraṇyaka-up. 4-4-8, 9, 23; Ānanda vallī 9 (Taittirīya-up. 2-9); Muṇḍaka-up. 3-1-4, 3-2-7~8, 11; Maitri-up. 7-9, 10 etc.
 - 18) Muṇḍaka-up. 1-1-1; Bhṛg vallī 6 (Taittirīya-up. 3-6); Maitri-up. 2-3 etc.
 - 19) Muṇḍaka-up. 2-2-3, 3-2-6; Kaivalya-up. 22; Mahānārāyaṇa-up. 12-3 etc.
- <キーワード> ウパニシャッド, ダーラー・シュコー, スーフィズム, ベルシャ語
(北海道大学大学院)